寿で暮らす人々　６０

　大賀　栄さんのこと

　　初めての出会いはどんなだったか記憶も定かではなくなってしまった。表情や挙措動作も上品な方でした。澄んだ目をしていて八の字眉毛は、色白の穏やかな丸顔によく似合っていました。大賀さんのゆっくりとした語り口は、控えめで謙虚な人柄を思わせました。周囲とのかかわりを避けひっそりと目立たない生活を送っているように見えました。老人クラブの活動や行事へのお誘い、匡済会診療所の健康診断の案内をとどける形で、少しずつ親しく話しをするようになりました。無類の読書家で、よく野毛の市立図書館に通っていました。彼の発案で、老人クラブに市立図書館から借りだした小さな図書館ができ、一月に1回ほど図書を入れ替えた。大賀さんの役割である。

　ある日、思いつめた表情で相談があるのだが、と相談室にやってきました。寿に来ることになったいきさつと身の上の話でした。生活保護の担当さんには、ずっと嘘をついていました。自分には住民登録ができないわけがあります。悪いことはしていません。自分は人間として許されない道義的責任を負っているんです。こんなこと、人が多くいる福祉の担当さんの前では話せません。自分の身辺をきれいにして始末をつけようと思います。私にもプライドがあります。この下層社会では生命を終わりたくありません。マニラに行きたいと思っているのですが、パスポートも取れませんし夢ですね。

神戸の資産家の家に生まれ、K商高卒業後、東南アジア方面で木材関連のバイヤーをしていたという。日本にはあまり戻らなかったので、資産は弟に譲ったという。

敗戦で帰国。戦後の混乱の中、きびしい生活が続いて、昭和35年、妻子を置いて横浜に出てきた。アメリカ人が泊まるホテルに泊まってバイヤーをやりましたが、個人では信用されず、商談がまとまりそうになっては失敗しました。生活に困り港湾で働くようになりました。仕事がしやすい寿に来ました。今思えばその時に帰ればよかったのですが。怪我などもして、帰るなら土産を持ってなどと思っているうちに年月がたってしまいました。

住民票などは、悪用されると妻子に迷惑がかかると考え偽名で暮らしてきました…。

　土地勘もなく知りあいもない横浜の土地では思うようにはいかなかっただろう。帰ろうか、何とか成功したいと思うはざまで今日になってしまった。いまさら故郷へ帰ることなどできないが、妻や子どもたちの消息を知りたい、できれば会いたい…。他人に話そうとふみきるまでずいぶんと思い悩んだことだろう。

　その後何度か話を聞いて、大賀さんの気持ちもはっきりしてきた。ドヤに住んでいることは、妻子のためにも自分のためにも知られたくない。アパートに移って住民登録をしたい。妻子の住所と様子を知りたい。弟の財産を当てにしていると思われたくない。などだった。大賀さんの気持ちの区切りをつけて新しい生活に踏み出すため、大賀さんの妹さん2人と連絡をとることになった。

　昭和49年7月、大賀さんに同行し神戸駅の近くの湊川神社で、やがて来るだろう妹さん2人を待つことになった。大賀さんは緊張で落ち着かない様子だった。

　あっけない出会いだった。妹さんは「おたがいよう年をとりおって…」僕はその場を離れた。それからしばらく3人で話し合った。

　神戸駅で別れるとき妹さんは、「苦労かけさせよって…。まあ、無事でよかった。母さんと長女は苦労しよったで。あんたの娘や息子のところは知らされんよ…。そのうち会えることもあるだろうよ。」

　その日は、六甲の旅館に泊った。大賀さんは、妹さんたちに今のこと、これまでのことすべてを話したという。この夜、大賀さんは、興奮を表情に浮かべてせきを切ったようにいろんなことを話した。

　横浜に戻って、大賀さんは大車輪でアパートを探した。念願の住民登録も済ませた。

後日談

弟さんや妹さんとの手紙のやり取りもできるようになった。アパートに転居して1カ月

程後、弟さんがアパートに訪ねてきて一晩ゆっくり話し合った。翌日、大賀さんは弟さんと一緒に寿福祉センターを訪ねて来てくれた。

　郷里からは、栗やシイタケなど送ってくれるようになったという。

　大賀さんの表情は輝きを取り戻した。大賀さんの本名は、○○　安兵衛さんといった。

　大賀さんの本名、安兵衛さんという名前は穏やかでお似合いの名前だと思うのだが、僕にはやはり「大賀　栄」さんである。

次回は、鈴本　豊さんのこと